

幼児の思いやり表現に対する保育者の認識

－不器用な思いやり表現の事例に対する行動評価から－

若林 紀乃

本研究は、日常の保育場面で生じうる幼児の不器用な思いやり表現を保育者がどのように認識しているのかを事例に対する行動評価から分析したものである。分析の結果、「困っている他者に気づく」ことを重視している保育者と「困っている他者のために行動する」ことを重視している保育者とに、その判断基準がわかれることが示された。さらに、年長女児に対しては、思いやりの気持ちよりもその表現方法を否定的に評価しやすい可能性が示唆された。しかし保育者は、不器用な思いやり表現をしてしまう幼児を「認めてあげたい」との共通した思いを持っていることから、不器用な思いやり表現をする幼児が否定的な評価をされないよう、今後、思いやり行動に関する判断基準について保育現場で深く議論されることが望まれる。

問題と目的

日常の保育において、幼児は目の前の困っている友達に気づいた時、幼児なりに試行錯誤を繰り返しながら思いやりを示そうとする。しかし、その示された思いやりの全てが必ずしも効果的に相手に伝わるとは限らず、思いやりを示した相手にも周囲にも誤解されたまま、葛藤場面を引き起こしたり、否定的な結果となる場合もある(若林, 2003)。このように思いやり表現が不器用になってしまった幼児を、保育者はどのように認識するのだろうか。

これまで、幼児の葛藤場面や仲間とのかかわり場面に対する保育者の認識は、子どもへの影響を鑑み、さまざまな研究で検討されてきた(例えば、本郷ら, 1991; 西山ら, 1998; 長谷, 2009)。これらの研究の多くは、保育者が自らの認識をもとにおこなった場面への対応は言語的であっても非言語的であっても子どものその後の行動へ与える影響が大きいことを述べている。そのため、保育者が何を信じ、どのような認識に基づき対応を考えるの

かは検討すべき重要な課題であるとされてきた。勿論思いやり場面においても、幼児が示した思いやり行動に対する保育者の反応・評価は、その後の幼児の思いやりに大きな影響を及ぼすと考えられている(Doescher & Sugawara, 1989)。まして、思いやりの表現が不器用になり、思いやり場面とも葛藤場面とも受け取りがたい場面において、叱責、賞賛どちらかの対応をしようとしたならば、保育者は難しい判断と対応の検討に迫られ、子どもの姿を誤ってとらえる可能性も考えられる。

しかし、これまでの研究において、思いやりを上手く表現できない幼児に対する保育者の認識を検討した研究はほとんどみられない。前述のとおり、日常の保育の中で、思いやりの気持ちを持っていたとしても、その表現の仕方が不器用であるがために、否定的な評価をされたり、または葛藤状況を引き起こしてしまう幼児も少なくない。保育者の思いやり場面に対する認識をあらためて検討する必要があるといえよう。

ところで、保育者が幼児の行動を認識する



際、子どもの性別はどの程度関連するのだろうか。青野（2008）によれば、保育者は保育の活動内で默示的に性差を意識しており、保育環境やカリキュラムに少なからず反映しているという。我々はジェンダーフリーを意識しながらも、自己主張をし始める2歳児頃から男児の扱いにくさを感じたり、女児の従順さを認識する可能性がある（高濱・渡辺, 2006）。思いやり行動においても、例えば女児を援助的であると保育者が認識することは大いに考えられるだろう（Berman, 1980）。

そこで本研究では、思いやり表現が不器用な幼児の事例に対する保育者の認識を性別の想定などもふまえて探索的に検討する。さらに、保育者自身が思いやりのある行動をどのような行動であると考えているのかをあらためて検討することにより、不器用な思いやり表現の受容のされ方について探る。

方 法

【対象者】平均保育経験年数28.4年の保育者12名（同一園ではない）を対象とした。

【手続き】観察から得られた、幼児の不器用な思いやり表現の（結果として相手に思いやりの気持ちをポジティブに受けとってもらえなかった）事例2つを保育者に示し、各質問項目に対して自由記述にて回答を求めた。事例内容および質問項目は以下のとおりである。

＜事例内容＞
事例① 夕方の自由あそび時間、Rは折り紙をして遊んでいた。すると、少し離れたところに泣いているEがいた。お母さんに「帰り支度が遅い」と怒られたのが原因で泣いている様子だ。しばらくすると、Rは自分の折ったカエルの折り紙を持ってEに近づき何も言わずにEにカエルの折り紙をさしだした。しかし、EはRを泣きながら手で押しのけお母さんを探して立ち去っていった。

事例② 朝の自由あそび時間、Aは身支度を整えた後2人の友達と一緒に遊んでいた。そ

の近くでUが赤い折り紙を手元に持ってきて折り紙をしようと座った。するとTがその折り紙を横からスッと取った。Uは「Tが取った」と泣き出す。しばらくすると、AがUとTのところに近づき、Tをドンと押した。Tがやり返しケンカとなっていた。それを見ていたUはますます泣き続けた。

＜事例に対する質問項目＞

①RとAについて：年齢、性別、性格、をそれぞれ想定

②RとAの事例時の内面について：事例時の気持ち、行動選択の理由、結果の受け止め、をそれぞれ想定

③RとAに対する行動評価と対応：RとAの思いやり行動に対する評価、対応、この場面を思いやりのある場面だと思うか、について回答

＜思いやりに関する質問項目＞

①思いやり行動とはどのような行動か、②思いやりのある子は何ができる子か、③RやAのような子をどう思うか、について回答

結果と考察

【年齢・性別の想定】事例①について、12名全員が年長と想定し、性別に関しては5名が男児、7名が女児と想定した。事例②では11名が年中男児と想定した。

【性格の想定】事例①について、12名中11名がRを「周りの様子がよくわかる子」と想定した。また事例②では、12名中8名がAを「正義感が強い子」と想定した。

【事例時の内面の想定】事例①について、12名中9名が「Rは、Eがかawaiiそうという気持ちを抱いている」と想定した。また、事例②では、12名中10名が「Aは、なんとかしなくてはいけないという気持ちを持っている」と想定した。さらに行動選択の理由については、事例①では12名中8名が「折り紙は喜ぶから」といった理由を想定し、事例②では9名が「正義感」を行動選択の理由に想定



していた。結果の受け止め方については、事例①では8名が「仕方ないという気持ち」、事例②では9名が「Tが悪いと受け止めている」と想定した。

これらの結果から、各想定においてほとんどの保育者が一致しており、本研究における思いやり表現が不器用な幼児の事例は、日常いずれの園でも起こりうる事例であることが考えられた。

さらに、性格の想定や事例時の内面の想定から、保育者は不器用であったとしても思いやりを示す幼児に対しては肯定的にその内面を想定をすることが伺えた。

ただし、事例①に関して、年齢の想定は保育者全員が年長と想定していたにも関わらず、性別はその想定がおよそ半数ずつにわかれていた。

そこで、この性別の想定の違いが、思いやりの評価にどのように関連するのかについて次に検討する。

【性別の想定と評価・対応との関連】

<行動評価と対応>

まず、2つの事例の行動評価と対応について、事例の場面が思いやり場面であると思うか否かの評価とともに以下の表に示す。

表より、事例①および事例②の両事例に共通して、思いやり場面であると思う場合、その理由として「関わろうとした・気持ちはあった」などの内容があげられていた。一方、

思いやり場面であると思わない場合、その理由として「自己中心的・自己満足」といった内容があげられていた。このことから、思いやり場面であるかどうかの認識をする際、「関わろうと気持ちをもつ」だけで思いやりのある場面と判断するか、「自分のためでなく相手のために関わった」という内容までも判断の基準にするか、その判断基準に保育者間で差があることがわかった。

幼児の思いやりに関する定義は、向社会的行動もしくは愛他的行動として幾度となくその基準が再提示されてきた（例えば、Mussen & Eisenberg, 1977 ; 菊池, 1984 ; Eisenberg & Mussen, 1989）。自発性や外的報酬の有無、自己犠牲などの条件について繰り返し議論されてきたこの定義は、いまだ統一した基準にまでたどり着いていない。このたびの調査において、どの基準をもち思いやり場面を判断するのかについて保育者間で個人差が生じたことについて、定義の統一がなされていない研究の変遷を鑑みたとき、思いやりに対する価値観の複雑さゆえに保育場面での認識や対応を統一することの難しさが垣間見られた。

それでは、報酬の有無や自己犠牲などの基準以外にさらに思いやりに関する認識の相違を生じる要因となるものがあるのだろうか。

<性別の想定と行動評価・対応との関連>

先述のとおり、事例①において、保育者全員が年齢の想定を年長と想定していたにも関

表. 思いやり場面に対する評価と対応の主な内容

	思いやり場面であると思うか	理由	評価	対応
事例①	思う	困っている子に関わろうとしたから	優しい気持ちを持っている	優しい行動をとったことをほめる
	思わない	自己中心的な行動であるから	認めてもらいたいのだと思う	行動をおこしたことにについては認める
事例②	思う	人を思う気持ちがあったから	手を出したのは認められないが正義感はいい	言葉で意志を伝えられるよう仲立ちする
	思わない	自己満足な行動であるから	行動ではなく言葉で示した方がよい	それぞれの言い分を聞き話しあいをする



わらず、性別はその想定がおよそ半数ずつにわかれていた。そこで、性別の想定の違いが思いやり場面に対する認識にどの程度関連するのかを次より検討する。

まず、事例①において、Rを男児と想定した保育者のほとんどは、表出された行動を「やさしい行動」と評価し、「その行為をほめる」といった対応を示した。さらに、思いやりについても「泣いているEをなぐさめようとしたから思いやりがある」と肯定的に評価していた。

一方、女兒と想定した保育者のほとんどは、行動評価や対応については男児を想定した保育者と同様に肯定的な見解を示していたが、思いやりについては「おせっかいであり思いやりとはいえない」「一方的すぎる」「その行動をしないと気がすまなかっただけで思いやりではない」などと否定的な評価を示していることがわかった。

これらのことから、年長として想定した事例において、男児であれば「気づくこと」で肯定的な評価がなされるが、女兒に対しては思いやりの表現の仕方まで評価する場合もあり、年長女兒の表す不器用な思いやり表現については、必ずしも肯定的に受容されるまでには至らないことが考えられた。

Berman, (1980)によれば、教師や保育者は、女兒を援助的で支援的であると認識する場合が多いという。年長であったならば困っている友達に思いやりを示すのは当然のことであり、まして援助的である女兒ならば困っている友達の要求に確実にこたえるべきである、と認識しやすい可能性が考えられる。前述の報酬の有無や自己犠牲などの基準に加え、性別も思いやりを判断する重要な要因として保育者の中に根付いていることも視野に入れる必要があるのかもしれない。

それでは、そもそも保育者は思いやり行動についてどのような価値観を抱いているのだろうか。

【思いやりとRやAのような幼児について】

思いやり行動とはどのような行動か、という質問に対し12名中5名の保育者は「相手の様子を気づくこと」などと記し、12名中7名は「相手のために行動すること」などと記していた。

また、思いやりのある子は何ができる子か、という質問に対して、12名中5名が「友達の思いに気づくことができる」などと記し、12名中4名が「自分をおさえることができる」などと記し、12名中3名は「共有することができる」などと回答していた。

さらに、RやAのような子をどう思うか、という質問に対しては、ほとんどの保育者が「認めてあげたい」と記していた。

このことから、思いやりに対する保育者の価値観は、「他者の様子を気づくこと」に重点をおくか、「自分を犠牲にして相手のために行動する」に重点をおくか、2つの基準において違いがでるものの、RやAのような不器用な思いやり表現をする幼児に対しては、共通して「認めてあげたい」と考え、不器用なりにも他者に関わろうとしている彼らの思いやりを大切に育んでいきたいと考えている様子が伺えた。

まとめと今後の課題

本研究は、思いやり表現が不器用な幼児の事例に対する保育者の認識を探索的に検討し、保育者が思いやりのある行動をどのように認識しているのかをあらためて検討することが目的であった。

自由記述回答で得られた結果から、「困っている他者に気づくこと」に思いやりの判断基準をおく保育者と、「困っている他者のために行動すること」に思いやりの判断基準をおく保育者とに価値観がわかれていることが考えられた。さらに、判断基準には性別が関連している可能性もあり、特に年長女兒に対しては思いやりの表現方法を基準に不器用な様



を否定的に評価する場合があることが考えられた。しかし、思いやり表現が不器用になってしまう幼児に対して「認めてあげたい」との思いを保育者全員が共通して抱いており、必ずしも否定的な評価ばかりを考えるわけではないことが伺えた。

これらのことから、本研究では、保育場面における思いやりに関する価値観の統一が困難であること、しかし保育者が共通して「認めてあげながら思いやりを大切に育みたい」との思いを抱いていること、をあらためて浮き彫りにすることとなった。ただし、思いやり行動に対する判断基準が統一されていない場合、不器用な思いやりを示す幼児が時として否定的に評価されてしまう可能性も残されている。今後、不器用な思いやり表現にはどのようなものがあるのかを要因とともに検討し、行動に表れない思いやり（坂井，2005）も含め思いやりの表現のあり方を幅広く検討する必要があるといえよう。さらに、保育現場にて思いやり行動を子どもたちはどのように表現しているのかをあらためて議論していく必要があると考えられる。

引用文献

- 青野篤子 2008 園の隠れたカリキュラムと保育者の意識. 福山大学人間文化学部紀要, 8, 19-34.
- Berman, P. 1980 Are women more responsive than men to the young? A review of developmental and situational variables. *Psychological Bulletin*, 88, 668-695.
- Doescher, S., & Sugawara, A. 1989 Encouraging prosocial behavior in young children. *Child hood-Education*, 65, 213-216.
- Eisenberg, N. & Mussen, H.P. 1989 *The Roots of Prosocial Behavior in Children*. Cambridge University Press (菊池章夫・二宮克美 (訳) 1991 思いやり行動の発達心理 金子書房)
- 長谷範子 2009 幼児の対人葛藤場面における行動変容と保育者のかかわりに関する一考察. 四天王寺大学紀要, 47, 173-187.
- 本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子 1991 子ども間のトラブルに対する保母の働きかけの効果—保育所における1〜2歳児の物をめぐるトラブルについて. 発達心理学研究, 1, 107-115.
- 菊池章夫 1984 向社会的行動の発達 教育心理学年報, 23, 118-127.
- Mussen, P., & Eisenberg, N. 1977 Roots of Caring, Sharing and Helping. In Freeman (Ed.) *The Development of Prosocial Behavior*. (菊池章夫 (訳) 1988 思いやりの発達心理 金子書房)
- 西山修・片山美香・謝文慧・山崎晃 1998 被攻撃場面における幼児の介入期待と保育者の期待認知との関係—攻撃特性に注目して—. 幼年教育研究年報, 20, 27-34.
- 高濱裕子・渡辺利子 2006 母親が認知する歩行開始期の子どもの扱いにくさ—1歳から3歳までの横断研究—. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 3, 1-7.
- 坂井玲奈 2005 思いやりに関する研究の外観と展望—行動に表れない思いやりに注目する必要性の提唱—. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 45, 143-148.
- 若林紀乃 2003 思いやりを上手く表現できない幼児—思いやりの表現方法の分析から—. 幼年教育研究年報, 25, 55-61.